

同志社大学司書課程・司書教諭課程主催

2016年度図書館見学会および見学記

(日程)

9月28日(水)

(オプション) 12:30 鳥取県境港駅集合

12:30-14:00 水木しげる記念館/水木しげるロード見学

15:25 鳥取県米子駅集合

15:35-16:35 本の学校 見学

「米子ワシントンホテルプラザ」に宿泊

9月29日(木)

9:30 ホテル出発

10:00-12:00 米子市立図書館見学

14:00-16:00 鳥取県立図書館見学

「ヴィアイン岡山」に宿泊

9月30日(金)

9:00 ホテル出発

10:00-12:00 瀬戸内市民図書館もみわ広場見学

15:00-16:30 岡山県立図書館見学

図書館見学記

ツアー全体

経済学部経済学科 林 直 樹

2016年度の図書館ツアーは、9/28-30の三日間にわたって決行された。ここでは、大まかにそれぞれを振り返っていきたい。

出発は、まだまだ朝日が昇って幾許もない京都駅から新幹線に乗って。上りの東京方面には新幹線を使ったことがあったものの、下りの方には新幹線を使ったことがなかったのだが、早い早い。JR在来線の普通列車など相手にならず、新快速や阪急の特急電車をごぼう抜きしていく。新幹線の速度、そしてひいてはお金の力に唾然としていると何時の間にやら岡山駅へ到着した。ここからは特急に乗り換えて米子方面へ向かう。乗車位置を間違えあわや広島だか総社だかに向かいかけたところを後輩に救出され、米子行きの特急に乗車する。ターミナル駅というのはどうしてこう乗り場が多いのやら。

米子に到着した。ここからは電車を乗り換えて境港へと意気込んでいたところ、まさしく見慣れた広い背中が。われらが ushi 先生である。ここで、筆者の脳内に疑問が宿る。新幹線乗り場にも米子行き特急にも居られなかった ushi 先生は、一体何時の間に何処からこちらにいらしたのか。答えは ushi 先生の口からすぐに明らかになった。曰く、空港。大地を走る鉄道

でもなく、日本海を渡るフェリーでもなく、空を直接飛んでいらしたのである。

まさしく我々の発想など飛び越える ushi 先生の移動手段に愕然としていると、何時の間にかやら境港駅へ到着していた。ところで、境港駅から水木しげる記念館へは、妖怪ロード(?)と呼ばれる道が整備されている。水木氏の描くユーモラスな妖怪たちが像となって道に並んでいるのである。ブロンズの像となった妖怪諸君が道行く我々の目を愉しませてくれる。水木しげる記念館では、氏の生涯にわたる作品が展示されていたほか、魅力的な妖怪たちがその伝承どおりのことをしている場所も存在した。ただし、楽しすぎて電車の時間がぎりぎりになってしまい、結果昼ごはんを ushi 先生に調達していただき電車の中で食べることになってしまったのは痛恨の極みである。改めて先生の懐の深さに感謝を示したい。

さて、境港で握ってもらった寿司に舌鼓を打ちながら我々が次に向かったのは、米子市内の NPO 法人本の学校である。こちらは書籍業に携わる専門人の育成をその活動目的としており、そのための講義や種々のイベントなどを企画しておられる。ここの職員さんの何名かにはこの後の飲み会にも参加していただき、旨い酒に加えてさまざまなお話をうかがうことができた。まこと感謝の極みである。ただ、個人的にここで最もインパクトのあったものを書き記しておくことを許して下さるとすれば、それは一階の書籍部に鎮座していた古(明治維新前後)の印刷機。本屋に入ってすぐに大きさ1メートル超のものごつい印刷機である。卑怯である。印象に残らざるをえない。ここまでが一日目であった。

二日目の見学は、米子市立図書館から。ビジネス支援にも力を入れている、有数の図書館といった印象。目を引いたのは雑誌スポンサーという制度。これは、市立図書館に置かれた雑誌に企業が広告を載せることができるというもので、地方の図書館にとってかなり上手い手ではないだろうか。このように、商都のリベラルな空気を図書館からも感じることができた。リベラルな空気を吸い込んだ後には、鳥取へと足を向ける。目的地は鳥取県立図書館である。

鳥取県立図書館は、国際交流ライブラリーや環日本海図書コーナーといった場所を設けており、海外図書の受け入れに積極的。司書にも語学能力を求めているとのことで意欲的に活動なされている。他にも図書館の入り口にはたくさんのチラシないしはパスファインダーが配置されており、暮らしの細やかなことまでサポートしようとする姿勢がうかがえる。しかしこのチラシ類、非常に数が多い。県立図書館の入り口に百枚を優に超える分量のチラシ類がずらりと並ぶ光景は圧巻である。日本有数の先進的な図書館に衝撃を受けながら本日の寝床である岡山まで電車で移動する。二日目夜には一日目のような飲み会は無く、各自で食事ということになった。私が選んだのはラーメン。それもつけ麺である。ひとりでは寂しいので後輩を連れ、岡山の地で味わったラーメンは美味だった。それにしても、岡山一番街で風情を味わいながら散策でもしようかと思っていたら、いかがわしいあんちゃんに声をかけられたので逃げ帰ってしまったのはまこと痛恨事であった。

三日目には、瀬戸内市民図書館と岡山県立図書館を見学した。瀬戸内市民図書館は先日できたばかりでの見学で、大変綺麗な図書館だった。人口数ではそこまで多くない都市でも、このような立派な図書館を建てられるのかと、改めて驚愕。中高生向けのチャダルト・ガレージといったスペースが存在し、わざと大人の目の届きにくい図書館の端の方に置くというにくい演出ないし細やかな心遣いに驚き、もし私が中高生なら足しげく通っただろうという妄想を抱いてしまった。

中高生の心を残す私には名残惜しくも、瀬戸内市民図書館を離れ再び岡山市に向かう。昼食を食べる際ににんにく入りのものを食べてしまうというハプニングをブレスケアでしのぎつつ、岡山県立図書館へ向かう路面電車に乗り込めば、そこには地元の音楽隊(?)の皆々様が。どうやら音楽隊の方々が演奏をする特別な電車に乗り合わせたようで、道中の話題には事欠かなかった。美しい旋律に身をゆだねているとそこはいつの間にか岡山県立図書館であった。年間貸し出しが1500万冊を超え、開架35万冊に閉架200万冊の収蔵能力があり、とりわけ閉架のうち110万冊は自動書架であるなどとにかく巨大な図書館であった。平日でも少なくとも3000人

が訪れるそうだがさもありなん。こうして図書館ツアーの全行程が終了したわけであるが、最後に一言。岡山から数千円をケチって在来線で帰ろうとしてはいけない。相生あたりの乗り換え待ちの長さに絶望するから。

本の学校

文学部国文学科 横 関 美 佳

今回5つの図書館と関係施設を見学させていただいた中で印象に残っているのが本の学校です。本の学校は書店業界の専門家を養成することを目標としてドイツの書籍業の専門学校を参考に創立されており、2階は展示、1階部分は書店になっています。また、1階にはカフェも併設されているので、購入した本をその場でゆっくりと読むことができます。

1階の今井書店は、中央にある丸い本棚が特徴的でした。内側にも本が並べられており、内側に入るとぐるっと本を見渡すことができ、あまり見ることができない斬新なデザインだったので印象に残っています。また、おすすめ本を募集し、募集した本を実際に並べる「本の森」というコーナーもあり、特徴的なデザインの丸い本棚と「本の森」から、図書館のような雰囲気を感じました。

2階では、古い出版物や広告などの展示を見せて頂きました。虫眼鏡で見るととても小さな豆本や、色々な和綴じ本など、中々見ることができないものを見ることができ、貴重な経験になりました。様々な貴重なものを見せて頂きましたが、その中でも1番印象に残っているものは、活版印刷機です。実物は見たことがなく、活字も見たことがなかったので、実際に見ることができて感動しました。活字を持ってみると、意外と重さがあることにも驚きました。

そのほか、米子市立図書館、鳥取県立図書館、瀬戸内市民図書館、岡山県立図書館を見学させていただき、本の学校をふくめ、見学会は貴重な経験になりました。来年もぜひ参加できたいと思います。

瀬戸内市民図書館もみわ広場

文学部国文学科 金 谷 千佳子

瀬戸内市民図書館にはツアー最終日に伺いました。瀬戸内市民図書館は2016年6月に開館したばかりの新しい図書館で「もみわ広場」という愛称で親しまれています。瀬戸内市民図書館の基本理念である「もちより・みつけ・わけあう広場」から頭文字を取って付けられた名前です。図書館運営への住民参加を重視しており、図書館建設の際には市民の方々の意見交換の場を積極的に設けていたそうです。学生との企画会議も開かれたそうで、大人だけで決めるのではなく幅広い年齢層の意見を取り入れようとしてされている点に、徹底した住民参加の姿勢を感じました。

学生の意見から実現したものの一つとしてチャットルームと呼ばれる部屋を見せて頂きました。グループでの学習室として開放されていますが、ちょっとしたおしゃべりのためなど様々な目的で学生たちに気軽に利用されているそうです。開館してからまだ間もないにもかかわらず、室内に設置されたホワイトボードには数々の利用の痕跡が残っていて、利用頻度の高さが窺えました。このチャットルームはチャダルトガレージというスペースに含まれています。チャダルトとはチャイルドとアダルトを組み合わせた造語で、子どもと大人の間の世代、つまり中高生世代のための空間です。将来のための本やライトノベルなど一般的にヤングアダルト

に分類される図書が排架されていました。中高生が大人の目を気にせず利用できるよう2階の奥まったところに設置されていて、利用者の立場に立った図書館づくりがなされているのだとわかりました。

特に印象的だった点として、館内サインやパンフレットなどのデザイン性が高いということがあります。図書館ロゴマークをはじめとしたこれらのデザインは瀬戸内市出身のデザイナーの黒田武志さんが手がけたものだそうで、館内の様々な部分で見つけることができます。施設案内のパンフレットをいただいたのですが、一般的に図書館で見られるようなものとは異なっていて驚きました。温かみのあるイラストや写真が豊富に掲載されており、冊子体ではなく一枚の大きな紙を折りたたんだ形になっていました。シンプルでありながら遊び心に溢れていて、思わず手に取って開きたくなるような魅力的なパンフレットでした。

このツアーに参加するのは三回目ですが、普段伺う機会のない施設を見学することができるのでいつも良い経験になっています。今回のツアー目的地である中国地方も初めて訪れた地だったので、どの施設も新鮮で楽しかったです。